表記形式と言語形式のポーカーフェース
ー中エジプト語にみる文献言語研究の難しさー

永　井　正　勝

1．はじめに

古文献を扱う文献言語研究において，とりわけ，死滅した言語の文献資料を扱う場合には，文献資料に書かれている文字を判読しながら言語を理解することが必要となる。つまり，「文字の判読」と「言語の抽出」という２つの作業が基礎研究として求められる。その後，文献資料から抽出された言語を対象として言語記述が行われることになるが，文献資料は言語に対して往々にしてポーカーフェースであり，背後に存在する言語の姿を簡単には示してくれない。そこで本稿では，筆者の専門とする古代エジプト語を題材に，文献言語研究における２つの作業について述べたのち，文献資料とその背後に隠されている言語の関係について考えてみたい[1]。

2．文献言語研究における２つの作業

2.1. 文字の判読

文献資料を読むという行為は，すべからく，文字を判読する作業を伴うものである。現代日本人が現代日本語の活字資料を読む場合には，文字の判読という行為が行われていることを意識することはないが，それは意識に上らないだけであって，文字の判読行為がなされていないわけではない。事実，手書きの手紙を読むとき，その書き振りによっては，文字の判読に時間を要する場合もある。ましてや，古代エジプト語の文献資料のように，複雑な文字表記が採用されていて，なおかつ死滅した状態にある言語の文献資料を扱う場合には，文字の判読が重要となるのは自明なことであろう。しかも，古代エジプト語の場合には，文字の判読結果が学者によって異なることが珍しくない。そこで次に，中エジプト語の資料を用いて文字判読の難しさについて確認してみたい。

中エジプト語は聖刻文字と神官文字の２種類の文字で主に表記されていた。

聖刻文字は石材などの硬質な書字材料に石工などの職人が彫り込むことによって表現されるディスプレイ用の文字であった。それに対して，神官文字はパピルスなどの軟質の書字材料に書記がインクで記した実用的な文字として存在していた。エジプト語を表記した文字というと，一般には聖刻文字が有名だが，書記が日常的に使用していた文字は聖刻文字ではなく神官文字であった。

ところが，エジプト学の研究では神官文字に対する関心が低く，神官文字の字形研究は 100 年以上も前に書かれた Möller（1909-1912）が今日でも基本書となっている。その結果，エジプト学者であれば誰でも知っているような基本的なテキストにおいてすら，文字の判読において未だ課題を抱えた状況にある[2]。

このように神官文字の判読が研究課題となっているのは，原資料の文字の複雑さが影響しているのではなく，むしろエジプト学者が行っている研究慣習が足かせとなっているということを強く主張しておきたい。つまり，エジプト学では，神官文字資料を公開する際に，それを聖刻文字に改めた「聖刻文字転写」で示すという慣習が踏襲されており，しかも，そのような聖刻文字転写が出版されているが故に，神官文字を参照しない学者，つまり聖刻文字転写を資料として扱っている学者，が数多く存在しているのである。しかしながら，聖刻文字転写は言うまでもなく一次資料ではありえない。そのことを(1)で確認してみたい。

(1a)は「ラフーン・パピルス （Lahun Papyri)」の資料報告 （Griffith 1898） に掲載されている聖刻文字転写であり，(1b)はその報告に掲載されている現代語訳である。

(1)「ラフーン・パピルス」12,10=UC32058, line 10

a. 聖刻文字転写 （Griffith 1898: Pl. XII, line 10）

b. 現代語訳 （Griffith 1898: 32）

“the eastern slaves, 4 persons”

c. 写真 （Collier & Quirke 2004: UC32058, 10）

(1a)の左側に 4 本の線が見える。この報告ではこの 4 本線を数詞の「4」として判断し，(1b)のように「4 persons」との現代語訳を与えている。(1a)と(1b)を見る限り，この翻訳に疑問を差し挟む余地はなく，むしろ資料と訳の間に整合性が認められる。

だが，原資料の写真である(1c)を見ると，聖刻文字転写のあり方に疑問を感じることとなる。つまり，原資料の文字では最後の 4 本の棒線が同じ長さになっておらず，右側[3]から「長めの 1 本線＋短めの 3 本線」となっており，更には「長めの 1 本線」と「短めの 3 本線」の間に若干ながらスペースが認められる。加えて，これはカラー写真でないとわからないことだが，数詞の棒線は左側の線から書かれるため[4]，「短めの 3 本線」のうち右側の線のインクが薄くなっている。もし，「長めの 1 本線」が数詞の一部であったならば，そこまで一気に筆を動かし，4 本目の線のインクが最も薄くなっていたことと思われるのだが，実際には「長めの 1 本線」が濃いインクでしっかりとかかれている。このような書き振りから，「長めの 1 本線」は数詞ではなく「person」を示す *tp* の語の限定符であり，数詞部分は「短めの 3 本線」のみであるとの判断を下すことができる。

この箇所に関して，Grandet & Mathieu（1997: 233）も筆者と同様に長めの棒を限定符と判断し，数詞を「3」と捉えている。それに対して，「ラフーン・パピルス」の資料刊行の改訂版である Collier & Quirke（2004: UC32058, line 10）では，Griffith（1898）と同様に数詞部分が「4」と判断されている。このように，神官文字資料については，文字の判読について，学者間で意見が異なることが珍しくない。そして，このような判読の違いからわかるように，聖刻文字転写は一次資料そのものではあり得ない。

2.2. 言語の抽出

文献言語研究では，文字の判読が研究の第一段階となるが，それでは，文字の判読が完了すれば，それによって言語が理解されるのかと言うと，必ずしも

そうとは限らない。本節ではこの点について, 単純な例を挙げて考えてみたい。

(2a) をラテン文字が表記された文献資料として考えた場合，この資料からいかなる言語を導くことができるであろうか。

(2a) to be to be ten made to be

最初に, このラテン文字の表記が英語を記した文献資料であると考えた場合,

(2b) /tə bi tə bi ten meɪd tə bi/

と読むことができる。しかしながらこれでは全体として意味を成さない。ところが（2a）が日本語を記した文献資料だと考えた場合には,

(2c) /tobe tobe tenmade tobe/
「飛べ飛べ天まで飛べ」

と読むことが可能である。

この例から分かるように，文献資料の研究においては文字表記と言語とを分けて考えなければならない。そこで，文献資料に書かれている文字部分を「表記テキスト」と，また表記テキストから抽出される言語を「言語テキスト」と，それぞれ呼ぶことにしたい[5]。(2) の例で言うと，(2a) が表記テキストで，(2b) と (2c) がそれぞれ言語テキストとなる。

表記テキストと言語テキストは，それぞれ形式が異なっており，両者の形式が一致するとは限らない。そのことは，特に異形態を扱う場合に明瞭にみてとれる (3)。

(3)

表記テキスト	言語テキスト
a. 傘	/kasa/
b. 日傘	/hi-gasa/

形態素 {kasa} には (3a) /kasa/ と (3b) /gasa/ の異形態があるが，これらの異形態は漢字で表記した場合にすべて＜傘＞となり，言語形式の差が文字の違い

として現れてこなくなる。このように，同一の文字が表記されているからと言って，その読みまでもが同一になるとは限らない。古文献の研究においては，この点が難しいところとなる。

3．文献言語における形式と対象

言語の研究では，「形式」と「意味」のインターフェースがしばしば議論される。ソシュールの用語で言えば，形式が「能記（意味するもの “signifient”）」で，意味が「所記 （意味されるもの “signifié”）」となる。だが，ソシュールにとって，能記は「聴覚映像」のことであり，ここに文字は含まれていなかった（ソシュール 1972: 96-97）。それゆえ，文献言語における形式を考える場合，ソシュールの想定していた意味で能記と所記を使用するわけにはいかない。また，理由については 3.3 で後述するが，形式と意味という用語を使った場合にも文献言語の機能を示すことができない。そこで本稿では，「示すもの」と「示されるもの」という意味合いで，「形式」と「対象」という用語を用いることにする。

3.1. 形式としての表記テキストと対象としての言語テキスト

文献資料において，「言語の外形」（亀井他 1995: 336「形態」）として目に見えるかたちで存在しているのは表記テキストである。そして 2.2 で示したように，我々は表記テキストから言語テキストを抽出することになる。だとすれば，表記テキストと言語テキストの関係は，示すものとしての形式と示されるものとしての対象として位置づけられる。このように，文献資料における形式は，まずもって，表記テキストに求められる。

3.2. 言語テキストにおける形式と対象

古代エジプト語のような文献資料から言語テキストを抽出する際には，言語テキストの表現手段として “transcription” が用いられる。“transcription” については，「音声表記」や「音韻表記」という訳語が用いられることがあるが （亀井他 1995: 150-160），古代語の研究では音韻の解明が十分に行われているとは限らないため，本稿では 「音声」や「音韻」という用語を避け，“transcription” を「音転写」と呼ぶことにする。

また言語テキストでは，音転写を示すだけではなく，音転写の任意の単位に

対して意味 / グロスや訳が与えられることになる。言い換えれば，言語テキストの表示は，音と意味とによって示される。「ラフーン・パピルス」の例を使ってそれを示すと，(4)のようになる[6]。

(4)「ラフーン・パピルス」12,10=UC32058, line10

a. 写真 (Collier & Quirke 2004: UC32058, line 10)

b. 音転写，意味 / グロス，訳 (左から右へ表記)

pꜣ	*ꜥꜣm*	*tp*	*3*
定冠詞 .m.sg	アジア人 .m.sg	名 .m.sg	3

「アジア人 3 名」

名詞句としての(4b)は定冠詞 *pꜣ*，名詞 *ꜥꜣm*「アジア人」，名詞 *tp*「名」，数詞 *3*「3」の 4 つの語から構成され，それぞれの語において，音転写と意味 / グロスとが対応している。このように，言語テキストの内部に意味を担った単位を設定したとき，その単位は，形式としての「音転写」と対象としての「意味 / グロス」から構成される。

3.3. 文献資料における 2 つの形式

すでに述べたように，表記テキストと言語テキストの対立という点では，表記テキストが形式で言語テキストが対象となる。そして，言語テキストの内部に，形式としての音転写と対象としての意味とが結合した単位が存在する。このように，文献資料の研究では階層の異なる 2 種類の形式が存在することになる。そこで，形式として捉えた場合の表記テキストを「表記形式」と，そして言語テキストの内部に設定される形式としての音転写を「言語形式」と呼ぶことにしたい。

形式としての表記テキストは，対象としての言語テキストに対応するが，このことは，表記テキスト上の「文字 / 文字列」が，言語テキストの構成要素としての「音転写と意味の結合した単位」に対応することを示している。言い換えれば，「文字 / 文字列」という表記形式に対応する対象は，言語テキストの

中の「音転写」と「意味」の両者となる。このように，文字について語る場合には，形式と意味という 2 項対立では不十分であり，形式・音・意味の 3 項が必要となる [7]。

4．表記形式と言語形式のポーカーフェース：古代エジプト語研究の難しさ

形式が「言語の外形」であるならば，形式自体は見ればすぐに了解されるものであるはずである。だが，文献言語研究において，言語テキストの形式＝音は解釈によって導かれる対象であるので，それを形式と呼ぶとしても目に見えないことが多い。つまり, 言語形式を抽出するための材料としての表記形式は, 言語形式に対してポーカーフェースだと言える。それゆえ，ポーカーフェースの裏に隠れている表記テキストと言語テキストのインターフェースを解明することが，文献研究の課題となる。

本節では，エジプト語の表記を題材に，表記形式のポーカーフェース振りについて考えてみたい。

4.1. ポーカーフェースの理由：子音表記の原則

中エジプト語の表記がポーカーフェースである主要な原因は，子音表記の原則が採用されていることにある。つまり，言語テキストに存在する母音が表記テキストでは記されないため，言語形式が見えなくなっている。

(5) はエジプト語の最終段階であるコプト・エジプト語の例である。

(5)

a. 習慣相・能動態・主節

ⲡ-ⲛⲟⲩⲧⲉ	ⲥⲱⲧⲡ̄
定冠詞 - 神	選ぶ . 不定詞

「神が選ぶ」

b. 完了相・受動態・主節

ⲡ-ⲛⲟⲩⲧⲉ	ⲥⲟⲧⲡ̄
定冠詞 - 神	選ぶ . 状態形

「神が選ばれた」

(5a)は動詞 **cωτπ̄** /so:tep/ が不定詞の絶対形になっていることから，習慣相・能動態・主節の構文として解釈される。それに対して(5b)では動詞 **cοτπ̄** /sotep/ が状態形であるので，完了相・受動態・主節の構文として判断される。不定詞と状態形の活用の違いは，わずかに母音の長短の違いであり，不定詞絶対形では長母音の /o:/ が，そして状態形では短母音の /o/ が使用されている。このようにコプト・エジプト語の動詞活用では母音交替が重要な働きをなしており，同様なことが中エジプト語の活用においても存在していたことが想定される。

ところが，コプト・エジプト語を除く他の段階のエジプト語では，子音表記の原則が採用されていたために，母音が表記されていない。(5)の文を中エジプト語で表記すると(6)のようになる。

(6)

a. 習慣相・能動態・主節

stp *nṯr*

選ぶ . 習慣相 . 能動態 神

「神が選ぶ」

b. 完了相・受動態・主節

stp *nṯr*

選ぶ . 完了相 . 受動態 神

「神が選ばれた」

聖刻文字を見ればわかるように，中エジプト語の *stp*「選ぶ」という動詞では，習慣相・能動態・主節で使用される動詞活用(6a)と完了相・受動態・主節で使用される動詞活用(6b)とが同一の表記形式で示されている。しかしながら，このことは，習慣相・能動態・主節と完了相・受動態・主節の言語形式

が同一であったことを保証するものではない。むしろ，コプト・エジプト語の言語形式を考えれば，中エジプト語でも言語形式が異なっていたと考えるべきであろう。つまり，中エジプト語の表記は，言語に対してポーカーフェースなのである。

4.2. 表記形式と言語形式の対応

子音表記の原則に加え, 表記法の多様性も, ポーカーフェース振りに一役買っている。(7) は中エジプト語における *rn*「名前」(男性名詞) の語の表記例である。

(7)

言語形式	表記形式	
a. *rn*		男性名詞単数形
b. *rn-w*		男性名詞複数形
c. *rn-w*		男性名詞複数形
d. *rn-w*		男性名詞複数形
e. *rn-w*		男性名詞複数形

(7a) は男性名詞単数形の *rn*「名前」であり，(7b)～(7e) はその複数形 *rn-w*「(3 つ以上の) 名前」である。(7b) は単数形を 3 つ表記するという写像性によって複数形を表記したものである。単数形を 3 つ表記することで複数形が示されるのは, エジプト語における複数の概念が 3 以上の数を指すためである。したがって (7b) は「3 つの名前」ではなく,「3 つ以上の名前」を示している。(7c) は単数形を 3 つ表記する代わりに 3 本線を付したものである。この 3 本線が複数形を示す表記形式となっている。また (7d) は複数形の接尾辞 *-w* を表音文字で示したものである。そして最後の (7e) は，(7c) と (7d) の複合表記である。

このように複数形の表記法には 4 つの異なる形式があるが，ここで注意すべ

きことは(7b)～(7e)の違いが表記形式の違いとして存在しているのみで，言語形式としてはいずれも同一になるという点である。従って，言語テキストのレベルでは *rn*（7a）と *rn-w*（7b-e）の対立が存在しているのみであり，形態について論じる場合には，言語形式を利用して「男性名詞の複数形は単数形に接辞 *-w* を付加することによって形成される」という規則が記述される。

4.3.「動詞＋名詞」が示す文法範疇

stp nṯr（動詞「選ぶ」＋名詞「神」）という表記形式が習慣相･能動態･主節にも，完了相・受動態・主節にもなることを(6)で示したが，実は，この表記形式はさらに多様な文法範疇を内包している。そこで，*stp nṯr* という 1 つの表記形式に内在する文法範疇の種類を，Ockinga（2012）に依拠しつつ筆者なりにまとめてみると，(8)のようになる[8]。

(8) *stp nṯr* が示す文法範疇

a. 習慣相・能動・主節 [§69.2]
「神が選ぶ」
b. 習慣相・能動・副詞節 [§69.1]
「神が選ぶときに」
c. 習慣相・能動・関係節 [§108, §110]
「神が選ぶところの・・・」
d. 習慣相・能動・関係節・名詞化 [§108, §111]
「神が選ぶ者」
e. 習慣相・能動・名詞節 [§70.2]
「神が選ぶもの」
f. 習慣相・能動・副詞付加語焦点化構文 [§70.1]
「・・・でこそ，神が選ぶ」
g. 完了相・能動・主節 [§72]
「神が選んだ」
h. 完了相・受動・主節 [§77]
「神が選ばれた」
i. 完了相・受動・副詞節 [§77]
「神が選ばれたときに」

j. 完了相・受動・副詞付加語焦点化構文 [§77]
「・・・でこそ，神が選ばれた」
k. 未来時制・能動・主節 [§74.2]
「神が選ぶだろう」
l. 未来時制・能動・副詞節 [§74.2]
「神が選ぶために」
m. 未来時制・能動・関係節 [§109, §110]
「神が選ぶであろうところの・・・」
n. 未来時制・能動・関係節・名詞化 [§109, §111]
「神が選ぶであろう者」
o. 未来時制・能動・名詞節 [§74.1]
「神が選ぶだろうこと」
p. 未来時制・能動・副詞付加語焦点化構文 [§74.1]
「・・・でこそ，神が選ぶだろう」
q. 願望法・能動・主節 [§75.1]
「神が選ぶように」
r. 願望法・能動・副詞節 [§75.3]
「神が選ぶために」
s. 願望法・能動・名詞節 [§75.2]
「神が選ぶだろうこと」
t. 命令法 [§67]
「神を選べ」
u. 未完了相・能動・分詞・限定用法 [§99, §103]
「神を選ぶところの・・・」
v. 未完了相・受動・分詞・限定用法 [§99, §103]
「神によって選ばれるところの・・・」
w. 未完了相・能動・分詞・名詞化 [§99, §102]
「神を選ぶ者」
x. 未完了相・受動・分詞・名詞化 [§99, §102]
「神によって選ばれる者」
y. 完了相・能動・分詞・限定用法 [§100, §103]
「神を選んだところの・・・」
z. 完了相・受動・分詞・限定用法 [§100, §103]

「神によって選ばれたところの・・・」

aa. 完了相・能動・分詞・名詞化 [§100, §102]

「神を選んだ者」

bb. 完了相・受動・分詞・名詞化 [§100, §102]

「神によって選ばれた者」

cc. 未来時制・能動・分詞・限定用法 [§101, §103]

「神を選ぶであろうところの・・・」

dd. 未来時制・受動・分詞・限定用法 [§101, §103]

「神によって選ばれるであろうところの・・・」

ee. 未来時制・能動・分詞・名詞化 [§101, §102]

「神を選ぶであろう者」

ff. 未来時制・受動・分詞・名詞化 [§101, §102]

「神によって選ばれるであろう者」

gg. 不定詞＋目的語 [§84]

「神を選ぶこと」

このように，1つの表記形式である *stp nṯr* を Ockinga（2012）に依拠しつつ筆者なりにまとめると，(8a) から (8gg) まで 33 通りもの解釈が可能となる [9]。このような表記形式のポーカーフェース振りは，33 通りのオプションの中から如何にして1つの正解を導くことができるのかという技術的な課題 [10] よりも，学者が設定した文法範疇がそもそも妥当であるのか否かという根本的な問いを我々に投げかけている [11]。

5．終わりに

かつてソシュールは「書は言語をみる眼をおおうのだ：それは衣装ではなくて，仮装である」（ソシュール 1972: 46-47）と述べていたが，これは書（＝文献言語） の価値を否定したものではなく，むしろ，書から言語――とりわけ音――を導こうとする態度に警鐘を鳴らしたものであった。つまり，言語があるから書が存在するのであって，その逆ではない。河野が「文字言語は畢竟，音声言語の上に成り立つ」（河野 1994: 4）と述べていたのも，同様な考え方に基づいている。

しかしながら，死滅した言語の文献資料を扱う場合には，言語テキストを構

成する音と意味が表記テキストの裏に隠されてしまっており，「文字のがわからみるならば，むしろ言語のほうが実体不明で，文字こそ実体ではあるまいか」（亀井他 2007: 162）と思いたくなるのも事実である。多様な表記形式を支えている中エジプト語という言語は，いったいいかなる姿をしていたのであろうか。氷山の一角から氷山全体を明らかにするような研究となるが，今後も，まずは氷山の一角の姿を徹底的に明らかにすることを軸の 1 つとして，エジプト語の解明に取り組んでいきたい[12]。

註

1　古代エジプト語はアフロ＝アジア諸語に属する言語であり，古エジプト語，中エジプト語，新エジプト語，民衆エジプト語，コプト・エジプト語という 5 つの段階を経て，やがて死滅した。そのなかで，中エジプト語はエジプト人自身からも古典して扱われていた重要な位置を占める言語段階である。そこで本稿では，中エジプト語の事例を中心にエジプト語の表記について論じることにする。

2　中エジプト語の文学作品として最も良く知られているパピルス写本の 1 つが「難破した水夫の物語 （Hermitage Papyrus No.1115）」である。この写本のモノクロ写真はおよそ 100 年前の著作である Golénisheff（1913）に掲載されているが，現在でも，未だ文字の判読について議論がなされている。本写本の文字の判読については永井（2010a），永井（2010b），Nagai（2011）を参照。

3　神官文字は右書きとなる。古代エジプト語の書字方向については永井（2005）を参照。

4　文字の配列は右書きとなるが，文字そのものの書き方としては，字形により左から筆が入ることがある。

5　かつて庄垣内も，「古文献に書かれた言語の言語学的記述は，実はフィールド調査に基づいた調査言語学と似たところがある。調査言語学では実地調査によるデータが整わなければ正確な言語記述ができない。文献言語学でも文献が読み解かれて，テキストが整わないと言語に関する考察は難しい。」（庄垣内 2003：1） と述べていたが，庄垣内のいう「文献」は本稿で設定した「表記テキスト」に，そして「テキスト」は「言語テキスト」に対比させることができるであろう。庄垣内の指摘にもあるように，「文献」＝「表記テキスト」は読み解かれ，「テキスト」＝「言語テキスト」として整えられなければ，言語資料とはならない。

6　コプト・エジプト語を除く古代エジプト語では，原則として子音のみが表記されていたこともあり，現状において子音を含めた音韻の解明が進んでいるとは言い難い。そこで(4b)ではエジプト学で用いられる記号を使って音転写を示している。

7　漢字の性質として「形・音・義」が指摘されるが，「形」の単位を文字列にも適用させれば，この性質はすべての文字表記に当てはまることだと言える。

8　(8)に掲載した用語は Ockinga（2012）に掲載されている用語の和訳ではなく，

一貫性を考慮して筆者が与えたものである。また，いくつかの範疇では文頭小辞や動詞の接尾辞が付随的に付加されるが，それらの要素については割愛して(8)を作成した。なお，「動詞＋名詞」というのは，エジプト学で言われる *sḏm=f*「動詞＋接尾代名詞主語」を包含する表現である。

9 このように多様な文法範疇が想定されることの１つの背景は，動詞 *stp* が強変化動詞（いかなる活用においても語根のすべてが消失しない動詞）に属しいているからである。弱変化動詞（活用によっては語根の一部が消失する動詞）としての弱子音動詞と重ね子音動詞，ならびに不規則動詞の場合には，文法範疇によって動詞形に違いが見られる。しかしながら，それらの動詞の場合も，すべての活用が表記形式で区別されるわけではなく，むしろ多くの範疇の表記形式が同一になる。

10 いくつかの範疇では文頭に小辞が置かれることがあるし，また関係節と分詞の限定用法の場合には動詞の前に先行詞が置かれることがあるなど，*stp nṯr* という表記形式の外側に，範疇を特定するための手掛かりがあるのも事実である。しかしながら，それらを差し引いても，動詞の表面的な形式としての表記形式は，文法範疇に対してポーカーフェースである。

11 たとえば Allen（2010）は未来時制の関係節(8m)-(8n)と未来時制の分詞(8cc)-(8ff)の存在を認めていない。このように，中エジプト語の研究では設定されている文法範疇やその内容について，学者ごとに違いが見られるのであり，文法範疇そのものがアプリオリに存在しているわけではない。

12 筆者はかつて，文字表記のあり方から，中エジプト語の文法書に掲載されている「否定辞 *nn* ＋主語＋前置詞 *ḥr* ＋不定詞」構文が幽霊形であることを指摘することができた（永井 2010b）。

参照文献

Allen, James P. (2010) *Middle Egyptian. An Introduction to the Language and Culture of Hieroglyphs*. 2nd. Edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Collier, Mark and Stephen Quirke (eds.) (2004) *The UCL Lahun Papyri. Religious, Literary, Legal, Mathematical and Medical*. BAR International Series 1209. Oxford: Archaeopress.

Golénisheff, Wladimir (1913) *Les papyrus hiératiques N°N° 1115, 1116A et 1116B de l'Eremitage impériale à St. Pétersbourg*. Saint Peterburg.

Grandet Pierre and Bernard Mathieu (1997) *Cours d'égyptien hiéroglyphique*. Paris: Khéops.

Griffith, Francis L. (1898) *The Petrie Papyri. Hieratic Papyri from Kahun and Gurob (Principally of the Middle Kingdom)*. London: Bernard Quaritch.

亀井孝・大藤時彦・山田俊雄(2007)『日本語の歴史3』(平凡社ライブラリー), 平凡社.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（1995）『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂.

河野六郎（1994）『文字論』三省堂.

Möller, Georg (1909-1912) *Hieratische Paläographie. Die aegyptische Buchschrift in ihrer Entwicklung von der fünften Dynastie bis zur römischen Kaiserzeit*.

I-III. Leipzig: J.C.Hinrichs'sche Buchhandlung.
永井正勝（2005）「古代エジプト聖刻文字の書字方向－一般統字論構築の一助として－」『一般言語学論叢』8: 21-45.
永井正勝（2010a）「聖刻文字の E9, E20/21, E27 に対応する神官文字－「エルミタージュ・パピルス No.1115」と「プリス・パピルス」を事例として－」『文藝言語研究（言語篇）』58: 43-54.
永井正勝（2010b）「中エジプト語の進行相の否定文について－「否定辞 *nn* ＋主語＋前置詞 *ḥr* ＋不定詞」構文の再検討－」『オリエント』53-2: 34-54.
Nagai, Masakatsu (2011) "On Deciphering the Fifth Sign of Line 179 in *The Tale of the Shipwrecked Sailor*: Examining the Original Hieratic Papyrus," *Studies in Language and Literature* 60: 49-67.
Ockinga, G. Boyo (2012) *A Concise Grammar of Middle Egyptian*. Third Edition. Mainz: Philipp von Zabern.
ソシュール，フェルディナン・ド（1972）『一般言語学講義』岩波書店.
庄垣内正弘（2003）「文献研究と言語学－ウイグル語における漢字音の再構と漢字訓読の可能性－」『言語研究』 124：1-36.